



Title	雨森芳洲の文事
Author(s)	康, 盛国
Citation	大阪大学, 2014, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/33845
rights	
Note	やむを得ない事由があると学位審査研究科が承認したため、全文に代えてその内容の要約を公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

論文内容の要旨

氏名(康盛国)	
論文題名	雨森芳洲の文事

論文内容の要旨

雨森芳洲はどのような人物か、という問い合わせに答えることは容易ではない。芳洲は、木下順庵の門下として、新井白石、祇園南海らとともにその名を知られた。また、対馬藩の儒者として、朝鮮通信使の接遇や藩の財政の建て直しにも貢献しており、実に多様な面を持ち合わせる人物である。

代表的な芳洲理解の有り様を、江戸時代の人物伝に見ることにしよう。『続近世畸人伝』（寛政十年刊）においては、語学に堪能で勤勉な性格の持ち主として紹介されている。『古今和歌集』を千回読むことによって和歌を学んだという逸話を紹介し、その勤勉さが常人の域を超えていることを述べるほか、芳洲の著した『交隣提醒』が「政治の助」となったとも論じている。『先哲叢談』（文化十三年刊）においても語学に堪能なことや晩年の勤勉な和歌習得の逸話が紹介されているが、芳洲と同じ時代に生きた儒者・文人との交流により重点がおかれており、新井白石との関係や、荻生徂徠より「偉丈夫」と称されたことなどが示されている。『事実文編』（嘉永二年成）の「芳洲雨森先生伝」においては、白石との王号問題をめぐる論争及び徂徠との関係について言及しており、さらに「順庵称為後進領袖（順庵称して後進の領袖と為す）」という師・順庵の芳洲評、及び「常謂諸生日、犬馬之歯方八旬、更無他能。唯教人不倦耳（常に諸生に謂ひて曰く、犬馬の歎、方に八旬なれど、更に他を能くすること無し。唯だ人に教ゆること倦まざるのみ）」という、教育に対する芳洲の思いを紹介しつつ、彼の教育者としての側面を強調している。

以上の江戸時代の文献から見る芳洲は、「学問及び和歌などの文芸に至るまで、あらゆる文事に真摯な態度で臨む勤勉な学者」、「朝鮮通信使の接遇を含め、特に外交的な業務に力量を発揮した実務家」、「朝鮮語・中国語に堪能な語学専門家」、「晩年においてとくに子弟の指導に力を注いだ優れた教育者」などに要約されるだろう。この中で、近代以降の芳洲評価において最も焦点が当てられてきたのは、「外交的な業務に力量を発揮した実務家としての芳洲」である。国家間の関係が益々緊密になり、「外交」の重要性が増していく今日の潮流を勘案すると、とりわけ、芳洲の外交的な手腕や国際的な世界観が歓迎されたことは、自然なこととも思われる。

ただ、芳洲が、あたかも近代的な意味での「外交官」として存在していたかのような捉え方には、慎重になるべきであろう。泉澄一氏は、著書『対馬藩藩儒雨森芳洲の基礎的研究』（関西大学出版部、一九九七年）の中で、芳洲が対馬藩において携わっていた「朝鮮方佐役」等の職務が、実は文書記録を主務とする役方であり、外交現場の第一線に立つようなものではなかったことを根拠に、「朝鮮外交を管掌していた」かのような論じ方は誤りであると述べ、自身のそれまでの論考への反省をも含め、「外交家芳洲」に注意を向けがちな研究の動向に対して注意を促している。稿者は、対馬藩記録の実証的な調査を基盤にする、泉氏のこのような指摘に共感する点が多くあった。さらに一人の人物を規定する際に、ある一面だけに集中した評価あるいは研究に依拠してしまうと、その人物像を歪曲してしまう危険性を孕む、という示唆を得た。

そこで稿者は、芳洲の研究において比較的に顧みられることの少なかった文学者としての一面を考察することによって、芳洲についてさらに理解を深めたいと考えている。「外交的な業務に携わる実務家」以外にも、たとえば、「語学者芳洲」については、主に『交隣須知』や『全一道人』などの考察及び芳洲の言語観を中心に研究が進められており、「教育家芳洲」についても、彼の通詞養成に関する研究など、研究の蓄積が進められている。しかし、「文事に携わる勤勉な学者としての芳洲」は、晩年の和歌習得で代弁される「勤勉さ」を強調する性格論的な紹介こそ多いが、具体的な文事の内実を充明する論考はまだ充分とは言えない。

本論では、とくに芳洲の漢詩作品の基礎的な理解、芳洲の『莊子』観と江戸時代の『莊子』理解との関係、芳洲が関係した朝鮮通信使と日本の文人との唱和との有り様について分析することによって、芳洲の文事について総合的に理解することを試みる。以下、本論文の概要を示す。

第一章においては、芳洲の漢詩作品や漢詩集についての基礎的な整理を行い、彼の漢詩人としての事跡を明らかに

するとともに、芳洲の近世漢詩史における位置づけについて分析する。

第一章第一節では、現存する芳洲の漢詩作品について概説する。芳洲の詩は、『停雲集』（享保十三年刊）・『木門十四家詩集』（安政三年刊）に各々九首・二十六首が収録されているのみで、芳洲自身の詩集は刊行されていない。しかし、主に雨森芳洲文庫の中に、写本の形で芳洲詩集が多数残っている。そこで、これら写本の資料から、各詩篇の成立時期を推定することで、芳洲の作詩の足跡をうかがう。

第一章第二節では、芳洲詩集と芳洲の長男の詩集が合綴された『雨森芳洲・鵬海詩集』を考察する。同詩集は、芳洲文庫のほかに、関西大学附属図書館・筑波大学附属図書館にそれぞれ異本が存する。三本ともに写本で、芳洲の自筆ではない上に、字句や収録詩数において異同があり問題を含んでいる。本節では三本の比較考察を行った上で、より善本に近い写本の選定を試みる。

第一章第三節では、『橋窓茶話』など芳洲の隨筆中に含まれた漢詩関連記録を中心に、芳洲の漢詩観を考察する。雨森芳洲の詩文に関する先行研究には、中村幸彦「風雅論的文学観」（『中村幸彦著述集1』中央公論社、一九八二年）、上野日出刀「雨森芳洲について（二）」（『活水論文集日本文学科編』29、一九八六年三月）、丹羽博之「雨森芳洲『橋窓茶話』に見える杜甫・白楽天」（『大手前大学人文科学部論集』7、二〇〇七年三月）等があるが、芳洲の漢詩観についての検討は、まだ充分とはいえない。そこで、本節においては、隨筆及び芳洲の書いた序文・書簡などから彼の漢詩観を考察し、それが当時の漢詩壇の流れとどう関わったかを究明する。

第一章第四節では、芳洲の作詩中「少年行」詩を考察する。管見の限りでは、芳洲の漢詩に「少年行」詩は五首存する。この「少年行」詩は、中国の樂府題を踏襲したものである。樂府題を踏襲した「少年行」を分析することは、中国詩の伝統をどのように継承しているかを考える上で有意義となる。そこで、芳洲の「少年行」五首を、中国詩、特に類似する語句が多く見られる李白詩と比較検討することにより、芳洲の詩の考察の試みとした。

第二章は、芳洲の『莊子』観を考察するものである。正統な朱子学を追求する「醇儒」芳洲が『莊子』にも多大な関心を寄せていたことは、興味深い事実として指摘されてきたが、芳洲の『莊子』観についての本格的な分析はまだ為されていない。稿者は本章で、芳洲における『莊子』観を分析し、芳洲の思想の一端を究明する。

第二章第一節では、芳洲の隨筆や漢詩の中で『莊子』と関わるものを見ることで、儒学とは相反する内容を多く含む『莊子』を、芳洲が受け入れることができた理由、また、彼の主張する「三教合一」論が『莊子』観とどう結びついているかを究明する。

第二章第二節は、芳洲が江戸中期の談義本『田舎莊子』（享保十二年刊）を高く評価したことの内実を考察するものである。『橋窓茶話』における芳洲の『田舎莊子』への賛辞は、儒者の俗文芸肯定という文脈のなかで、すでに指摘されているが、そうした評価がなされた理由や背景については、具体的な考察が行われていない。本節では、芳洲の『莊子』観と『田舎莊子』の作者の『莊子』理解が、ともに蘇軾の「莊子祠堂記」を踏まえているなど共通点を持っていることを指摘する。

第三章では、正徳元年と享保四年に来日した朝鮮通信使と日本の文人との間に交わされた詩文の交流について考察している。通信使との唱和の記録には、当時の日本の漢文学のあり方を考える上で重要な情報が含まれている。本章では、これらのなかから、とくに興味深いと考えられる二例について検討を加える。なお、第三章における考察は、芳洲の文事そのものを取り扱うものではないが、正徳元年と享保四年の通信使たちに随行していた芳洲は、その交流を仲介及び調整する役割を担当していた。芳洲が間近に見聞していた日朝交流が、彼の詩文観になんらかの影響を与えたであろうことが十分に想定されることから、芳洲の文事理解において意味をもつと考える。

第三章第一節では、朝鮮通信使申維翰による日本漢詩批評の内実を分析した。享保四年（一七一九）に朝鮮通信使として来日した申維翰は、泉州の大商人・唐金梅所の漢詩集『梅所詩稿』の序文を認めたが、同序文は朝鮮通信使の漢詩の評価基準を示す資料として分析の意義がある。そこで、申維翰の序文の内容を、梅所の実作とともに比較検討する。そして、その評価の背景に中国明代の古文辞派の影響が存在することを指摘する。

第三章第二節は、雨森芳洲文庫蔵『三宅滄溟筆談集』（写本）を通して、三宅家三代の通信使接応の事例を紹介する。三宅家は、三宅滄溟の祖父の代から、三代続けてそれぞれ朝鮮通信使たちと交流し、また、その接応の様子に類似性が多い点で興味深い事例であるが、まだこのことを論じた論考を稿者は知らない。本節では、『三宅滄溟筆談集』や『和漢唱酬集』（天和三年刊）及び朝鮮側の資料『海遊録』を考察し、三宅元菴・三宅遜宇・三宅滄溟と続く、三代の通信使との交流の実態を明らかにする。そして、三宅家三代に見られた共通点が、通信使接遇の典型化の一例であると位置づける。

以上の考察を通して、芳洲の文事の有り様とその意義を明らかにする。

様式 7

論文審査の結果の要旨及び担当者

	氏　名　(　康盛国　)	
論文審査担当者	(職)	氏　名
	主　查　　大阪大学 教授	飯倉 洋一
	副　查　　大阪大学 教授	加藤 洋介
	副　查　　大阪大学 講師	合山 林太郎

論文審査の結果の要旨

以下、本文別紙

論文内容の要旨及び論文審査の結果の要旨

論文題目： 雨森芳洲の文事

学位申請者

カシマ ソン クック
康 盛 国

論文審査担当者

主査 大阪大学教授	飯倉 洋一
副査 大阪大学教授	加藤 洋介
副査 大阪大学講師	合山林太郎

【論文内容の要旨】

本論文は、対馬藩の儒官雨森芳洲の文事、とくにその漢詩について、基礎的データの整理、漢詩観、『莊子』観、芳洲の媒介した文人と朝鮮通信使との交流などを通して考察したものである。芳洲は、外交的な業務に尽力した実務家というイメージが強く、近年は語学者・教育者としても光が当たられるようになったとはいえ、文事に関する事跡については、たとえば晩年に古今和歌集を千回読んで和歌を学んだなどの、勤勉さを強調する性格論的な紹介が多かった。そういう先行研究の不備を踏まえ、文人としての芳洲像を提示すべく書かれたものである。

本論文は、現存する芳洲の漢詩作品の文献学的な整理、芳洲の『莊子』観と江戸時代の『莊子』理解との関係、芳洲が関係した朝鮮通信使と日本の文人との唱和の有り様について分析・考察することで、芳洲の文事についての総合的理解への基礎固めを試みたものであり、第一章「漢詩人としての雨森芳洲」、第二章「雨森芳洲と『莊子』」、第三章「雨森芳洲を仲介にしてなされた日朝間の文学交流」の三章からなる（400字詰原稿用紙換算 340枚）。

第一章第一節「芳洲漢詩の全体像」では、現存する芳洲漢詩集、芳洲詩を収める詩華集について概観する。特に、雨森芳洲文庫に残る写本の芳洲詩集から各詩篇の成立時期を推定し、芳洲の作詩の足跡をうかがう。第二節「『雨森芳洲・鵬海詩集』諸本の考察」では、『雨森芳洲・鵬海詩集』の現存する三本（芳洲文庫本、関西大学本、筑波大学本）の写本を比較考察したうえで、関大本で誤りを修正しつつ、筑波大本をテキストとして用いるのが妥当と結論づけている。第三節「雨森芳洲の漢詩観—『橋窓茶話』を中心に—」では、『橋窓茶話』をはじめとする芳洲の著作中に見られる漢詩関連記事を検討し、彼の漢詩観の特徴として、①技巧にこだわる傾向を批判する、②道徳的な性情を表現する詩を理想とする、③自分を飾らないありのままの心情表現をよしとする、という3点を指摘し、これらを江戸後期の清新論的文学観の萌芽として位置づけている。第四節「雨森芳洲「少年行」と李白の詩」では芳洲の作詩中「少年行」五首を考察し、特に李白詩の影響を指摘する。

第二章第一節「雨森芳洲と『莊子』—三教合一論へのつながりを中心に—」では、芳洲の「莊子」に関わる言説を分析し、芳洲が林希逸注の『莊子』を読んでいたこと、莊子が孔子を理解し、孔子は釈迦を理解していたと認識する「三聖一致」観を持っていたこと、その認識には、林希逸注『列子』や蘇軾「莊子祠堂記」などの中国文献が影響を与えていたことを指摘する。第二節「雨森芳洲『橋窓茶話』中の『田舎莊子』への賛辞の内実」は、芳洲が佚齋樗山の談義本『田舎莊子』を評価するのは、『莊子』に孔子を謗るような論が含まれていても実は莊子

は孔子を理解し貴んでいると認識していること、その認識の根拠に蘇軾の「莊子祠堂記」を置いていることなどが、芳洲と共に通しているからであると指摘する。

第三章第一節「朝鮮通信使の日本漢詩批評—『梅所詩稿』の申維翰序文をめぐって—」では、芳洲が紹介した泉州の商人唐金梅所の漢詩集『梅所詩稿』を読んだ朝鮮通信使の一員申維翰が、中国明代の古文辞派の影響を受けて、梅所の詩を批評していることを示している。第三章第二節「雨森芳洲文庫蔵『三宅滄溟筆談集』の考察—三宅家三代の通信使接応時の類似性を中心に—」では、三宅家三代の朝鮮通信使の接応と文学交流の有り様を、従来ほとんど言及のない資料を用いて紹介し、滄溟が先代の経験をどう生かしたかを考察している。

【論文審査の結果の要旨】

本論文は、外交官的側面にのみ言及が偏っていたきらいのある雨森芳洲の文事的側面に注目し、従来ほとんど検討されていない資料を調査分析することで、新しい知見を多く提示しており、雨森芳洲研究を大きく進めている。また近世日本漢詩史研究、近世日本思想史研究、日朝交流史研究などにとっても有益な情報や考察を含んでいると考えられ、その広い射程は申請者の今後の研究の展開に大きな期待を抱かせるものである。

本論文は三章構成であるが、各章がそれぞれの視点で芳洲の文事を照射する仕組みになっている。第一章で、従来ほとんど顧みられることのなかった芳洲の漢詩について、諸資料によってその全貌を把握・整理したことは、漢詩人としての芳洲の基礎的研究として貴重な成果である。その中で特に重要な『雨森芳洲・鵬海詩集』の諸本を考察し、堅実な方法で善本を定めたことは申請者の書誌・本文研究の力量を示している。また芳洲の漢詩觀を江戸後期の清新論的文学觀の萌芽として位置づけたことは、反論も予想されるものの、重要な問題を提起している点で価値がある。芳洲の『莊子』觀を考察した第二章は、必ずしも多くの資料を用いているわけではなく、盤石な論とは言えないが、きちんと手順を踏んでその内実を明らかにしており、一定の成果と認められる。第三章は、芳洲周辺の文人の朝鮮通信史との文学交流について考察したもので、朝鮮側の資料をも駆使した実証的な手法は、筆談唱和集研究に新たな地平を拓くものとして注目される。以上のように、本論文は芳洲研究に豊かな成果をもたらし、隣接研究領域にも刺激を与える可能性を含んでいる点で、高い評価を与えてしかるべきである。

ただし、本論文にも若干の問題点がある。第一に雨森芳洲の漢詩については、基礎的事項の把握漏れがあった。また「少年行」を除いて、漢詩の内容の分析や評価についてほとんど言及がなかったのは「文事」研究としては物足りなさを残す。第二に芳洲における実作と理論の乖離についてどう考えるかという考察が欠けていた。第三に、少ない事例を基に断定的に結論を下すようなところがあるのは論文の客觀性を損なうと言わざるをえない。全体として様々な文事を扱っている反面、各論が継ぎはぎで形成されたような印象もあり、体系性という点では高い評価を下すことができない。

とはいって、日本近世漢詩文研究においては、ほとんど注目されていなかった雨森芳洲の漢詩の全貌を提示し、芳洲文事研究の基礎固めしたことや、今後の研究進展に大きな期待を抱かせる点などを考慮すれば、本論文の意義はきわめて大きい。よって、本論文を博士（文学）の学位にふさわしいものと認定する。